KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ジョルジュ・サンドとベリー地方：『笛師のむれ』をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 笛師, シャンソン・ポピュレール, ベリーとブルボネ, 三人のきこり, 旅 キーワード (En): 作成者: 平井, 知香子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006139

関西外国語大学 研究論集 第93号（2011年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.93 (March 2011)

ジョルジュ・サンドとベリー地方
―『笛師のむれ』をめぐって[1)]

平　井　知香子

要　旨

サンドは旅行好きで、イタリア、スペインなど外国のほか、オーヴェルニュ、ノルマンディなどのフランス国内を旅し、またパリと故郷のノアン（ベリー地方）は幾度となく往復している。しかしどんなに他の土地の風景がよくとも、ベリーに勝るものはなかった。「よその国の槲（かしわ）の木より、自分の村の蕁麻（イラクサ）の方がいいんだ」と『笛師のむれ』の主人公エチエンヌは語る。ジョルジュ・リュバンによればこの言葉はサンド自身を代弁している。

農民の平穏な生活と森の住民の奔放な生活との対立と融合という、作者独自のテーマを展開しつつ、少年少女の微妙な恋愛心理を描きだす『笛師のむれ』。作品の背景となったベリー地方とブルボネ地方に着目し、シャンソン・ポピュレール「三人のきこり」（ショパンとポーリーヌ・ヴィアルドが愛したという）を分析しながらサンド文学の秘密に迫ってみたい。

キーワード：笛師、シャンソン・ポピュレール、ベリーとブルボネ、三人のきこり、旅

はじめに

ジョルジュ・サンドの故郷であるベリー地方は、豊かな自然に恵まれ、多様性に富む伝統、風習、穏やかな気質などを特徴とし、均衡と調和の取れた最もフランス的な地方の一つである。フランスで最長のロワール川がわかれて、シュール、アンドル、クルーズなどの支流となって緑の田園をうるおし、変化に富んだゆるやかな谷間の景色を作り出している地帯である。地理的中央部にあるために、他の地域からの急激な変化を受けることが少なく、農民の間には太古から伝えられてきた伝承や風習が根強く残り、鉄道の開通による影響もサンドの生前にはさほど及ばず近代化は比較的緩慢であった。中でも「ヴァレ・ノワール」（黒い谷間）[2)]と呼ばれる一帯は、サンドが「オアシス」と呼び最も愛した風景であった。しかしながら農村にも及ぶ資本主義の弊害やブルジョワ階級の台頭、プロレタリア階級の悲惨や抵抗などの社会の変化につれ伝統が日々失われてゆくことを惜しみ、サンドは農民を主人公とした「田園小説」や、『フランス田園伝説集』*Légende rustique*（1858）の中にそれをとどめようとしたのである。

パリ生まれのサンドであるが、都会の生活に疲れたときは、必ずベリーに帰り再び生きる力を取り戻した。旅行が好きで、イタリア、スペインなど外国のほか、オーヴェルニュ、ノルマンディなどフランス国内を旅し、またパリと故郷の小村ノアンは幾度となく往復している。しかしどんなに他の土地の風景がよくとも、ベリーに勝るものはなかった。「よその国の榊(かしわ)の木より、自分の村のイラクサのほうがいいんだ[3]」と『笛師のむれ』*Les Maîtres Sonneurs*（1853）の主人公エチエンヌは語る。ジョルジュ・リュバンによればこの言葉はサンド自身を代弁している[4]。平坦な土地であるベリー地方の農民は、一つの場所に定住し、安穏な生活をおくるのが常である。サンドの小説ではそのベリーの人間が、まったく違う気質の人々の住む国ブルボネに修行に行くのである。こうしたことは稀である。農民の平穏な生活と森の住民たちの奔放な生活との対立と融合という、作者独自のテーマを展開しつつ、少年少女の微妙な恋愛心理を描きだす『笛師のむれ』。この作品の背景となったベリー地方とブルボネ地方に着目し、サンド文学の源流を訪ねてみたい。

1．『笛師のむれ』の成立

1852年12月31日、ジョルジュ・サンドは『母と子ども』（La mère et l'enfant）と題する新しい小説を書き始めた[5]。娘ソランジュのトラブルの多い結婚問題や、9年の交際のあとに別れたショパンの死など個人的に希望のない暗い数年が続き、そしてまた政治的にも、1848年の二月革命の失敗により、自由、平等、博愛の共和国の夢が消え去ったこの時期に、サンドは再びベリーの静けさの中で勇気を取り戻した。散歩、瞑想、そして夢想が田園的インスピレーションを喚起させ、再び『捨て子フランソワ』*François le Champi* や『愛の妖精』*La Petite Fadette* のような「麻打ち夜話」（Veillées du chanvreur）を生むことになったのである。

『母と子ども』という題名は、小説中では私生児の子どもの養育を任せられた若い娘が、事実に反してその子の母であると疑われるという未婚の母の問題を扱っているところから来ている。サンドは「母と子ども」のテーマをすでに『棄て子フランソワ』や、『愛の妖精』などいくつかの作品中で取り扱ってきた。しかし、1853年の2月には、小説は『笛師のむれ』と題され、民族音楽のほうへと方向転換することになったのである[6]。サンドにとって音楽のテーマは新しいものではない。サンドの故郷であるベリー地方には、独特の民族音楽があった。サンドが子供の頃から耳にしていた音である。コルヌミューズ（バグパイプの一種、風笛）やヴィエルという弦楽器による演奏で、行事の際は必ず行われ、結婚式のみならず葬式のときにも義務づけられていた[7]。これらの音楽に合わせてブーレという踊りを踊る風習があった。マルク・バロリ著『ジョルジュ・サンドの時代におけるベリー地方の日常生活』*La Vie quotidienne en Berry au temps de George Sand*[8] によれば、実際、ノアンの館（サンドの自宅）ではお客の

もてなしはベリー風にしばしば民族音楽を伴って行われた。大広間で、使用人たちは農民の晴れ着姿、男性はブルーズ（上っ張り）、女性はコワフかボネ（ボンネット）と呼ばれる被り物を身につけブーレを踊った。時にはショパンがブーレの曲をピアノで演奏し、サンドの娘ソランジュがそれにあわせて踊ったこともあったという。

２．麻打ち夜話

サンドはこの作品を友人で画家のウジェヌ・ランベールに献じている。

> あなたは、私がまだ小さくて百姓たちの話を聞く暇があった時代に夜なべに聞いた物語を、私に話させるのが好きでしたね。で、これから、エチエンヌ・ドパルディウの物語を思い出して、自分の記憶のなかに散らばっている断片を繋ぎ合わせ見ようと思います[9]。

『魔の沼』の1851年の序文によると、サンドは田園小説『魔の沼』、『棄て子フランソワ』、『愛の妖精』、『笛師のむれ』の４作品を連作として「麻打ち夜話」という総題のもとにひとまとめにする計画を持っていた。この計画は実現には至らなかったが、彼女の意図通り、４作ともそれぞれその特徴を備えている。なかでも『笛師のむれ』は、サンドが幼い頃、ベリーの麻打ちの老人、エチエンヌから聞いた話であり、第一夜に始まり、第三十二夜を最終とする完全な「麻打ち夜話」の形をとっている。

まず「麻打ち」とは麻布の産地ベリー地方に見られる麻打ち職人のことである。彼は毎年九月の終わり頃になると夜通し麻を打ち続ける。その夜なべ仕事の傍ら語って聞かせる話という形式を借りたのが「麻打ち夜話」である。サンドは幼いころ麻打ち機の周りで胸を躍らせながら、狼に化けた魔法使いや、墓場の預言者フクロウの不思議な話に耳を傾けた思い出を持っていた。

『魔の沼』の付録に登場人物の農夫ジェルマンとマリーの結婚式の模様が記述されている。実際にサンドの知人がノアンで行った結婚式の模様を採録したものである。その中に「墓掘りの男」と「麻打ち」のよる掛け合いある。ベリー地方では彼らが伝統的な結婚式にも重要な役割を果たしていたことがわかる。マルク・バロリによると、麻打ちは特殊な技術と機械が必要なため、家々を回り、人々から信頼されている、話し上手な人物である。また幻想的な夜話を語る「麻打ち」に関連する不吉なコノテーションを持つ職業がある。すなわち「縄製造業者」は絞首刑に使用する麻縄を編む人であり、「織物業者」は死者がまとう麻の衣を織ることを暗示するという[10]。いずれにせよサンドは実際の農民の生活を生き生きと作品中に再現した。

次に「夜話」（Veillée）は田舎独特の風習である。民話の語りを文学に取り入れた形である。

この文学形式は、ジャンリス夫人の『お城の夜話』*Veillées du châteaux*（1784）以来流行していた。サンドは子供の頃ジャンリス夫人の『お城の夜話』を母から読み聞かされていたことがある。そのときの不思議な夢想は子供心に強く残った。この体験が故郷の風習である麻打ちと結びつき「麻打ち夜話」の構想が生まれたと考えられる[11]。

「夜話」Veillée（村祭りのイベント）ノアンにて筆者撮影

３．森の人と畑の人

ベリー地方の小さな村ノアンの麻打ち老人エチエンヌがこの物語を語ったのは、1828年のことである。彼が生まれたのが、「前の世紀の54、5年」で、話の中心は彼が19歳ごろなので、時代は1770年代のことになる。少年エチエンヌは、アンドル県の町、サン・シャルチエで最初の聖体拝領を従姉妹（またいとこ）のブリュレットと、ジョゼフとともにしている。ジョゼフは陰気な子供で、「寝ぼけやのジョゼフ」とか「上の空のジョゼフ」[12] といわれていた。霊感がある少年でふくろうの目にたとえられているその目は何か見えないものを見ていた。エチエンヌは子どもの頃からブリュレットが好きだったが、彼女が何くれとなくジョゼフをかまうのが気にいらない。

エチエンヌはある日、父親と馬市へ馬を売りに行くため旅をした。その帰り道にこの辺りでは見かけないどこか風変わりな少女に出会う。エチエンヌがどこの国の者かとたずねると少女は言う。「どこの国でもないわ、森の者よ。じゃあ、あんたは、どこの国の人なのよ？」（《Moi, je suis des bois.》）この問いに「お前が森の者なら、おら、麦畑の者だよ」（《Moi, je suis des blés.》と彼は答える[13]。森の人と畑の人、この二人の最初の出会いがすでに物語のテーマを暗示している。

このエチエンヌの答えは、ベリション（ベリーの住人）のアイデンティティを表している。農業を主な産業とするベリー地方において「小麦」はなによりも貴重な食物である。サンドの社会主義小説『アンジボーの粉挽き』*Le Meunier d'Angibault*（1845）の主人公、グラン・ルイの職業は「粉挽き」であった。そして『棄て子フランソワ』の主人公も奉公から帰ると水車小屋に行き、「粉挽き」として懸命に働く。この「粉挽き」という職業にサンドはいかなる意味をこめていたか？粉挽きのグラン・ルイは次のように言う。

> 小麦は植物の中で最も気高い。パンは食物の中でもっとも純粋なものだ。
> (Le blé est la plus noble des plantes, le pain le plus pur des aliments.[14])

食物としての「小麦」は一般にパンを主食とするフランス人のアイデンティティを表すと言われている。グラン・ルイのこの言葉は、フランス人の共感を生み、小麦を挽く水車小屋のある風景は、人々の郷愁を誘う。サンドはすでに『アンジボーの粉挽き』を書いた時点から「小麦」と「パン」に強い関心を抱いていた。農業を主な産業とするベリー地方と、材木を切ったり、炭焼きをしたりして生活する森の国ブルボネの接点は普通あまりない。しかし、サンドの小説ではジョゼフという変わり者の青年が笛の修行にブルボネに行くことをきっかけに、異なる二つの民が交流することになる。

４．葦笛とユリエルの登場

第四夜のこと。ジョゼフは葦笛を作り、自分で作った曲を吹いた。その音色はブリュレットの心を動かし、その頬には大粒の涙が流れていた。

> 「笛を吹きながら俺が思ったこと、見たことは、お前にもやっぱり見えたんだ。お礼を云うぜ、ブリュレット！お前のお蔭で俺にもはっきりわかったんだ、自分が気違いじゃないってことが。[…]この蘆の切れっぱしみたいなやつが！こっちの考えていることを言ってくれる。眼で見るように見せてくれる。口で話すように話してくれる。心のあるものみたいに優しくしてくれる。こいつは生きてるんだ！[15]」

ジョゼフの心に浮かんだ同じ幻影を、ブリュレットは葦笛の音色の中に見たのである。サンドはすでにショパンの影響の下に書いた小説『歌姫コンシュエロ』*Consuelo* において、アルベルト伯爵が演奏するバイオリンの音色がコンシュエロに幻影を呼び覚ます光景を描いている[16]。

オペラ歌手のポーリーヌ・ヴィアルドをモデルとしている『歌姫コンシュエロ』において、専門的な音楽教育を描いていると同時に、民衆音楽を賛美する章[17]がある。アルベルトの従僕で、純粋であるが狂気にとらえられているズデンコはボヘミアの古い民衆音楽を保存している。彼は、自然の中で音楽を身につける「上の空のジョゼフ」につながる人物である。

ノアンの東にあるサン・シャルティエで不思議な事件が起こる。ある夜、ジョゼフがいつの間にか黙って出て行ったのでエチエンヌはその後をつけていった。森のはずれの大きな桝(かしわ)の木があるところまで来たとき不意に大きな鳴り物の音がし、羊歯(しだ)っ原から真っ黒な獣が飛び出してきた。そしてそこにジョゼフの姿があったのだ。この真っ暗な夜の森の出来事は、麻打ち夜話にふさわしい幻想的な雰囲気をかもし出している。結局それはブルボネ地方からやってきた騾馬師の青年ユリエルの大笛の音で、獣は彼の騾馬の群れであったことが後でわかる。サンドは、息子のモーリスに挿絵を描かせ、ベリー地方に昔から伝わる伝説を『フランス田園伝説集』として残している。不思議な獣や悪霊のついた木、狼を連れた笛師などにまつわる伝説は、迷信深い農民の想像力から生まれたものであるが、これらが物語の背景にもなっている。

「騾馬」（ラバ）というのは、牡ろばと雌馬との雑種で、丈夫で小食のところから労役に使用されていた。「騾馬師」は、馬や車では通れない、道もない深い森や、険しい山道を、騾馬の背中にのせて荷物などを運ぶのを商売にしている人たちのことでもう今日ではみられない。笛師も民族音楽の保存という形では今も残っているが、この作品に描かれているような笛師や騾馬師の同業組合のようなものはもう存在していない。作者はベリー地方の失われゆく風習を惜しみ人々の忘却から救おうとした。ブルボネの騾馬師で笛師でもあるユリエルは、精悍で、利口で、闘いにはめっぽう強く、しかも正義感にあふれ、愛情深い好人物である。ユリエルの名前は彼が生まれた土地の名前「ユリエル」からとったものである。

第六夜、ユリエルの騾馬が畑を荒らしたため、エチエンヌとユリエルは取っ組み合いの喧嘩をする。最後はユリエルが鷹揚なところを見せ、二人は和解する。ユリエルはそのとき次のように言う。

> 「お前らは蝸牛みたいに、しょっちゅうおんなじ風を嗅いで、おんなじ樹の皮をすってるのさ。なにしろ、世界ってものが四方を取り巻くあの青い丘のところでおしまいになるもんだと思ってるんだからな。ところが、あいつは俺の国の森なのさ。俺に言わせりゃ、いいかエチエンヌ、世界ってやつはあそこから始まるんだ。[…]音楽はブルボネのものであって、ベリーのものではない。ジョゼフにはそれが分かったんだ[18]」

ユリエルによればベリーの音楽よりブルボネの音楽が優位にある。ジョゼフはユリエルのおかげで、自分に音楽の才能があることに気がついた。そして、初めてもらった給料で風笛を買

い笛師になる決心をし、ブルボネに修行に出かける。しかし、あまりに笛に熱中しすぎたため病気になる。ジョゼフはこのまま母にも、恋しいブリュレットにも逢えず森の中で死んでいくと嘆く。そこでエチエンヌとブリュレットがジョゼフの母のかわりにブルボネにかけつけることになる。ここでジョゼフの人物像の中にショパンの面影を見出すことができる。ショパンは音楽家として独立するため、故郷ポーランドをあとにする。フランスで結核の症状が重くなり、死に直面する。そして、母と姉がポーランドから駆けつけるのである。病弱で、性格的にも繊細である両者には孤高の天才音楽家のイメージが共通している。

『笛師のむれ』の原題はフランス語で《*Les Maîtres Sonneurs*》である。笛の師匠として免許のある人々のことを指す。主人公の一人ユリエルと、大頭（おおかしら）（le grand bûcheux）と呼ばれているユリエルの父バスチャン。彼がジョゼフの師匠となって笛の指導をした。ベリー地方の笛師にはカルナ親父とその息子がいる。そして新たに笛師の資格試験を受け、笛師の仲間に入るジョゼフ。これらが主な笛師たちである。エチエンヌから見ればベリーの笛師カルナはれっきとした音楽家と思えるが、ジョゼフに言わせればブルボネの笛師より明らかに劣っている。また、大頭の目からすれば、音楽家としての才能について、ユリエルとジョゼフの間にも歴然とした差がある。

> 「曲を覚える人間と作る人間とじゃ、そこにたいした違いがあるんだ。世間にや、指がすばしこくて物覚えが確かで、人に習った曲を気持ちよく歌って聞かせる人間もある。しかし、なかにゃ、人に習うだけじゃちっとも得心せず、しきりに新しい思いつきを捜しながらぐんぐん自分一人でやって行って、あとにくる笛師全部に自分の見つけたものを授けてやるような人間もある。ところが、俺ははっきりそういうが、ジョゼフはつまりそういう方の人間なんだ。おまけにそれだけじゃなく、あいつの身のうちにや、とても立派な天分が二つもあるんだ。一つはつまりあいつが生まれた平地から来る天分で、そこから落ち着いた強い静かな思いが湧いてくるんだし、もう一つは俺たちの方の林や丘から来る天分で、こいつは後からひとりでにわかって来たもんだが、そこからつまり心の深い、激しい、もの哀しい思いが湧いて来たわけだ。だからやつは、ちゃんと聞く耳のあるものから見れや、ただの田舎の笛師風情なんかとはまるで別物なんだ。つまりそれこそ昔あったような本当の笛師頭で、一番腕のいい笛師連中でも一生懸命になって聞くし、その揚句これまでの習慣もすっかり変えさせちまうような、そういう人間なんだ。[19]」

この天才の定義に関して、ソフィー・アンヌ・ルトリエは『ジョルジュ・サンドのフランス遍歴職人たち』に関する論文集の中で、下線部分を引用しながらジャン＝ジャック・ルソーの定義であるとし、「この時期サンドはルソー主義者であった」と断言している[20]。しかし、ここ

でルトリエが指摘していなかった部分に、まだ重要な要素が残されていることに注目したい。つまりジョゼフに「立派な天分が二つある」という点である。一つは平地から来る天分で、もう一つは林や丘から来る天分である。後述するように、ベリー地方とブルボネ地方の両方の音楽の天分がジョゼフのなかで融合されたとき初めて真の音楽の天分が開花したのである。ここに、ただルソーの継承者としてでなく、サンド独自の芸術観が存在することを忘れてはいけない。またショパンやポーリーヌ・ヴィアルドが、学究的な音楽家であっただけではなく、民衆的な音楽をも愛した真の芸術家であったことを、サンドは高く評価していたに違いない。

5．旅―ベリーからブルボネへ

サンドは『笛師のむれ』の執筆を開始した時期に、18世紀の地図を調べている。1853年2月25日、ノアンから息子のモーリスに宛てた手紙の中で、「もし存在するものならカッシニ（Cassini）のブルボネの古い地図を送っておくれ。[…] 小説のために役立てるつもりなので急いでいるのだよ」と頼んでいる[21]。ベリーからブルボネの森を抜けユリエルにいたる旅。そしてまたベリーへの帰途。サンドは家族やショパンを伴ってたびたびこの方面の小旅行をしたことがあった。また、このあたりは思想家ピエール・ルルーがブサックにいた頃、彼女がよく行き来していた馴染みのある土地である。今回はさらに詳しく実際の地図を求め、まるで自分自身が本当の旅をしているような感覚で小説を書き進めた。

季節は7月。一行はノアンを夜明け前に出発。昼前にメリテの森にかかる。ここで昼食。ノアンを出発して旅人たちはおよそ25キロの道のりをいったことになる。「葉隠れ川」という小さな小川。一面に睡蓮の花が浮いている。川のところは木陰になっている。ユリエルは荒れ草のちっともないとてもいい場所を探すと、籠の蓋を取って、樽の栓を抜いて、おいしい弁当を食べさせてくれたが、それが実に手綺麗で、ブリュレットに対して実に丁寧だったので、彼女もその嬉しさを包みきれなかった。しかし彼女が冗談に「手とついでにその黒い顔も洗ったら」というとユリエルは目立たない場所に身を隠してしまう。ブリュレットはユリエルを怒らせたと思い、終いには泣き出す始末である。ベリーからブルボネにいたる旅は三人にとって森の中を行くさわやかさ、快適さと同時に、突然襲い来る嵐や、思わぬ事件にでくわすという波乱に満ちたものとなる。

サン・サチュルナンとシジアイユの間の平らな荒れ地を通り抜け、ジョワイユウズ川を渡った。あたりの景色は、エチエンヌの目にはますますひどくなって来るような気がした。騾馬師によると、ベリーよりずっと裕福なきれいな国だということだが、エチエンヌには青々と茂った麦畑がどこにもなく、やっぱり自分の国がいいと思うのである。

夜になると危険が身に迫ってきた。そのうちやっと明るくなって月が出たと思うと、ロッシュ

の森のアルノン川という川がもう一つの川と落ち合っているところにでた。この森の中で、オーヴェルニュなまりの上ブルボネの言葉を話す騾馬師の一行に出くわす。中に一人の悪党がいて、「悪魔みたいな手でブリュレットの腕をつかんで、まるでブリュレットを連れて行こうとするような」様子を見せた。流血の惨事になりそうなところをユリエルが説得、ブリュレットも怒って気丈に立ち向かうと、一行は立ち去って行った。ブリュレットはこんな寂しい森の中に来て、悪党にひどい目に遭わせられそうになって、こんなことなら、こなければよかったというと、ユリエルは彼女の悔しさを晴らすため、きっとあいつに仕返しをすると誓うのだった。この誓いが不吉な前触れとなる。

なぜ『笛師のむれ』の中でこのような事件が起こったのか？『モープラ』をここで思い起こしてみると、ある共通点があることに気づく。ラ・ロシュには中世に建築されたラ・ロシュ・ギルボーという古い城の廃墟が今でも残っている。この城は、『モープラ』の城ではないかといわれている。主人公はベルナール・ド・モープラという若者で、山賊の一族に育てられるが、彼らの住処である小さな城はラ・ロッシュ・モープラと名づけられている。ラ・ロシュでブリュレットは騾馬師の一団に出会い、その一人に誘拐されそうになったのだが、小説『モープラ』の冒頭でも、ヒロインのエドメが山賊たちに脅かされ暴行を受けそうになる。同じラ・ロッシュという地名と、ヒロインが襲われるという事件、この二点が共通している。岩を意味するラ・ロシュの城は、アルノン川に囲まれた切り立った岩の上に建てられていて、暗い山賊のイメージとぴったりと結びつく。したがって、ラ・ロッシュでヒロインの身に危険が迫ったとしても単なる偶然ではなかったのではないだろうか。もう一つ重要なことがある。ジョルジュ・サンドが『笛師のむれ』を執筆した同じ年に劇『モープラ』がオデオン座で上演され好評を博したことも、この二つの作品が無関係ではない証拠といえそうだ。

ラ・ロッシュから登り道を通ってメープルへ着く。アルウの森からシャンベラの森に繋がっている荒地ばかりの寂しい国。ここは高台になっていてどこまでも見渡せる景色だった。「なにしろ、オーヴェルニュの樅の樹と来たら、大きくて立派で、こんな畑ばかりの国じゃとても見られない代物だからな」とユリエルは自慢していた。エチエンヌは、実にそのとおりブルボネの森は実に見事であると感嘆し、生まれて初めて見た白い幹のブナについて「こいつは槲の次ぎにや樹のなかの王様で、立派つてことじゃ槲にはかなわないにしても、その代わりずっと格好がいいつて言ってもいいくらいだ」と二つの地方の樹木を比較している。

サンドの晩年の童話に「ものを言う樫の木」*Le Chêne parlant*（1876）がある。ベリーの伝説を集めた『フランス田園伝説集』にもリュプーという悪魔つきの木が出てくる。そして『笛師のむれ』においても木に対する迷信は付きまとう。木に対する信仰はもともとケルトの宗教であるドルイド教に特有のものであり、その汎神論的自然観にサンドは共感を覚えているのである。

ロッシュの森を抜けメープルという村を経てしばらく行くとついにジョゼフたちのいる森に着いた。一行を出迎えてくれたのは、ユリエルの父で、バスチヤン親爺といった。別に学問はしていなかったが物知りで、頭がよく働き、大きな頑丈な男で、「大頭」と呼ばれていた。バスチヤン親爺は森が好きで、エチエンヌが自分の国のほうがいいといってもユリエルのように馬鹿にせず「どこの国だっていいさ。それが自分の国だとなれや」と言う。この言葉はサンド自身の考えを代弁しているのではないかと思われる。ジョゼフはユリエルの妹であるテランスに手厚い看病を受けていた。エチエンヌはこの少女に出あったとき、例の泥にはまった荷車に乗っていたあの少女であったことに気づく。口の隅にちゃんと黒子が一つあるので間違いなくあの「森の娘」だということが分かったのだ。

一行がブルボネに来て５日目の日曜日、森の人たちが集まってお祭りが始まった。突然そこに20人ばかりの騾馬師が現れ、その中にロッシュの森で喧嘩腰になって脅かしてきたマルザックという悪党がいて、ブリュレットに踊りの相手になれといって絡んできた。ユリエルは彼女を救うため同業組合の掟どうり、柊の短い棒を持って決闘をするはめになった。息詰まる対決の末、マルザックは突然地べたに倒れ二度と起き上がらなかった。騾馬師たちはマルザックの死体を連れて姿を消した。ユリエルは決闘に勝ったので、咎められることはなかったが、ブリュレットは自分のせいでこのようなことになり悲しむ。この事件は「悪魔の手先のような」というユリエルが使った形容があるように「騾馬師」という職業の暗黒面を現している。

十七夜、ブルボネ滞在を終え、ベリーへの帰りの旅について語り手のエチエンヌは、次のように言っている。

> わしの方は、こうして旅をしながら、ブルボンネエのサン・パレエやプレヴランジュなんて町を見られるのが嬉しかった。こいつは二つとも高い山の上にある小さな町で、それから、アンドル川の流れについて下って行ったところに、サン・ブルジュとペラッセエっていうまた別の町がある。そうして、この道は、わしらの村まで流れてるこの川について、まるでいちばん源のところからずっと下って行くんだから、わしもそんなに他国もんみたいな気がしなかったし、まるっきり知らない土地に来たような気持ちにもならなかった[22]。

こうした町の描写の中に、エチエンヌの心の変化を見て取ることができる。ベリーのほうがいいといっていた彼が、ブルボネの人たちに会ったことで、ベリーとブルボネの違いとともに、その共通性を見出したのである。対立から融合へ、作者の願いが風景描写の中にも現れているのである。サンドが小説中に使用した土地の名はほとんどが実在の土地名に由来するが、中には空想上の地名もあり、各々の土地は現実と空想の均衡の間に成立するトポスであった。現在では『笛師のむれ』の旅が観光の対象となり、サンドが実際の土地をモデルに忠実に描いたベ

リー、ブルボネ間の往復の道が、「ランドネ」（randonnée 遠出とか遠足）のコースになっている。ガイドブックによれば、『笛師のむれ』の旅を全て走破すれば八日から十日かかるが、三日でめぐる短縮コースもある。

6.「三人の木樵（きこり）」の歌

大頭はジョゼフに音楽の極意について次のように語った。

「音楽には、長調と単調がある、明るい調子と暗い調子といってるんだ。なんなら、青空の調子と曇り空のって言ってもいいし、さもなきゃまた、力や喜びの調子と悲しみや夢の調子といったっていい。そこでだ。よく聞いていろよ、ジョゼフ！平地ってやつは長調で歌ってるし、山は短調で歌ってるんだ。[…] この二つの調子は、どっちがどっちよりいいなんてことはないんだからな。単調ってものが知りたけや、陰気な淋しい土地へ行くことだ。この調子がうまく使えるようになるまでにや、時にや一度も二度も涙を流してみなけやならないぜ。何しろ、この調子は人間が自分の悲しみを嘆いたり、まあそれほどじゃあなくても、恋のため息をついたりなんかするとき使うように授かったもんだからな[23]。」

そういって大頭が「三人の木樵」という歌を笛で即興で吹き始めた。

三人木樵が集まって
春に谷間の草の上（ほら、鶯の声がする）
三人木樵が集まって　娘ひとりに口説きごと

なかで若いのが口ごもり
（薔薇を手にしているやつさ）
なかで若いのが口ごもり
好きは好きでも言えやせぬ

なかで兄貴は声あらげ
（斧を手にしているやつさ）
（ほら、鶯の声がする）
なかで兄貴は声あらげ
好きならいやとは言わしゃせぬ

さて、三番目のが歌うよに
胸に杏(あん)の花かざり
(ほら、鶯の声がする)
さて、三番目のが歌うよに
好きだよ、だからおいらのお嫁においで[24)]

ジョゼフは三人の若者が一人の娘を張り合うというこの恋の歌に魅せられ、自分たちの恋に当てはめて考える。これは、ブリュレット一人に、三人の若者、ユリエル、エチエンヌ、そしてジョゼフの三人が口説いている様子を歌った恋の歌ではないのか。一番目の若者は、思っていても口に出せない、それはジョゼフ。二番目の若者は声あらげ言い寄ろうとする、それはエチエンヌ。つまりしゃべっても、黙っても恋はうまくいかない。最後の若者は杏の花を胸に飾り、心を込め結婚を申し込む若者を表しており、その真剣さに娘は結婚を承諾するというわけで、その若者とはユリエルだというのである。

結局小説の結末ではこの歌どおりになる。ユリエルはブリュレットと結婚し、エチエンヌはテランスを妻にする。一方ジョゼフは、愛よりも音楽をとる。彼は笛の道に邁進した結果、誰もが認める腕前になる。そしてベリーの笛師の「組合」に入会し、大頭と気ままな放浪の旅にでる。ところが彼の自己中心的な性格は笛師たちとの間にいさかいを引き起こしてしまう。ある冬の朝、伝説の地モルヴァンで、彼は死体となって発見される。しかし、身体にはどこにも傷など見当たらず、笛師になるには悪魔に魂を売らなければならないとする、この土地の迷信どおりになったというのがもっぱらのうわさであった。ブリュレットには、最初からジョゼフが、彼女に対する愛よりも音楽への愛が勝っていることが分かっていた。この点についてもジョゼフはショパンをモデルにしているようだ。ちなみに、この「三人の木樵」の歌は、ショパンとポーリーヌ・ヴィアルドが好んでいたものである[25)]。

ここでサンドの田園小説の主人公の数に注目してみよう。まず『魔の沼』ではマリーとジェルマン。『棄て子フランソワ』では、マドレーヌとフランソワ。何れも男女二人のカップルである。そして『愛の妖精』では、ファデットと双子の兄弟ランドリとシルヴィネ、一人の女性に二人の男性。彼らは双子であり、互いに分身のような存在である。『笛師のむれ』ではさらに一人増えて、ブリュレットをめぐる三人の若者、エチエンヌ、ジョゼフ、ユリエルが登場する。この三人はそれぞれ違った個性の持ち主であった。なぜ三人なのであろうか。どうやら先ほどの三人の木こりの歌と関係がありそうである。サンドが40歳頃に書いた『ジャンヌ』*Jeanne*（1844)にも、三人の若者が登場する。そして、野の少女ジャンヌはベリーやブルボネに伝わるこの上なく美しい歌を歌っていた。

「春が来て半年になる…」
「小さな三人の薪割り職人がいた、…」
「歌っておくれ、ナイチンゲール、歌っておくれ、…[26)]」

この歌は、大頭が笛を吹き歌った「三人の木樵」と表現は多少違っているが、ガルニエ版のテキストの注によるともとは同じ曲であるらしい。一人の娘をめぐる三人の若者の話は、こうしたブルボネ地方や、ベリー地方に古くから伝わる歌の中にあった。

Les *cornemuseux* arrivent en jouant.　　モーリス・サンド画

おわりに

『笛師のむれ』の最後に、ブリュレットとユリエル、エチエンヌとテランスという二組のカップルの合同の結婚式が行われる。ベリー地方とブルボネ地方、二つの地方の境界を越え、試練を乗り越えたカップルを祝って、伝統に従って三日三晩コルヌミューズやヴィエルに合わせてブーレの踊りが続く。ユリエルはしばらくは旅に出る日もあろうが、やがて妻のため騾馬師の仕事をやめ、森の木樵としてベリーに定住することになる。放浪と危険な荒々しい仕事からすっかり身を引くのである。そして父の大頭も旅から帰り、子供たちに合流して一緒に暮らす。彼らの共同の住まいは『アンジボーの粉挽き』の舞台となったブランシュモンの古城があるバレ・ノワールの森シャッサンである。ベリーとブルボネの接点に存するこの土地は、貴族階級のものでもブルジョワ階級のものでもなく、むしろエデンの園といったユートピアのイメージ、サンドが幼年期以来抱いていた〈オアシス〉のイメージに等しい。

社会主義小説『アンジボーの粉挽き』では「結婚による階級の融和」が描かれ、結末は２組

のカップルの共同生活のユートピアが描かれていた。貴族のマルセルと職人のアンリ、成り上がりの金持ちブリコランの娘ローズと貧しい粉ひきグラン・ルイとの結婚により、社会階級の壁が消え、愛と友情に結ばれ、あらゆる階層のものが融和し、助け合って暮らすというものであった。田園小説『魔の沼』ではマリーとジェルマンとの年齢や経済の差を超えた結婚、『棄て子フランソワ』では育ての親と孤児フランソワの、年齢を超えた、近親相姦的なニュアンスを含んだ結婚、『愛の妖精』では貧富の差と、性格の相反する双子との恋愛と結婚がそれぞれ描かれていた。登場人物はいずれもベリー農民であり、物語の最後にはおとぎ話の結末のように、富の贈与があり、ハッピーエンドで終わる。これら田園三部作と比較すると、ベリー農民のほか、ブルボネの笛師や職人が登場し、貧富の差を問題としていない『笛師のむれ』は異色である。旅はどの作品においても物語に変化を与える転換点となるが、〈音楽〉、〈天才〉、〈秘密結社〉、〈共同生活〉などのテーマはむしろ『歌姫コンシュエロ』や『フランス遍歴職人』などと共通点を持つ。したがって、1848年の二月革命の瓦解のため放棄したかに見えた〈結婚による階級の融和〉と、〈継続的進歩〉（サンドが影響を受けたルルーの宗教思想）は、田園三部作を経過したのち〈音楽〉と〈旅〉に収斂、結晶し、〈結婚による二つの文化の融和〉という形で開花したのであった。

サンドは山や森が好きで、アルプスやピレネーにも登っている女性登山家の先駆者であった。数時間で行くことができる近くのオーヴェルニュには生涯三度も訪れている。最初は結婚後の1827年、８月、夫と息子とともに。二度目は『笛師のむれ』を書いた後1859年、最後はもうベリーを離れることはなくなった時期であるが、1873年、息子モーリスとその妻リナと子どもたちともに。ベリーの人々から「ノアンの良い奥方様」と呼ばれ、穏やかな晩年を過ごすサンドの心の中にはまた、山や森を駆け巡る果てしない放浪の旅への憧れがあった。

わが国で翻訳された『笛師のむれ』は岩波書店から上巻1937年、下巻1939年に出版された宮崎嶺雄訳のものがほとんど唯一のものである。ただ、今日忘れ去られたものとして、もう一つ子供向けの童話『森の笛師』が存在する。物語の最後は、バスチヤン親父とジョゼフが、放浪の旅に出るところで終わっている。

やがて、父子のように連れだったその姿は野の果てに消えていってしまった。[27)]

子ども向けの童話なので、ジョゼフの死で終わるより、旅に出る終わり方のほうがふさわしいと訳者が考えこうした結末を付け加えたのであろう。小説の結末ではハッピーエンドに深い陰りを与えている。しかし、ジョゼフは結婚には至らなかったが、彼の支持する音楽はショパンの場合と同様、永遠の命として史上に残り、今なお人々をひきつけてやまない。

『森の笛師』のカバー絵(田中　良)

シャトー・ダルス　(2004年、筆者撮影)

フランスでは、最近『笛師のむれ』の足跡を訪ねる旅が人気である[28]。またベリーでは、1975年以降、小説の舞台となったサン・シャルチエと、2009年からは会場にサンドの友人ギュスターブ・パペの居城「シャトー・ダルス」も加わって、「弦楽器と『笛師のむれ』の国際音楽祭」という催しが開催されている。さらにインターネットの動画サイト（You Tube）ではテレビ映画『笛師のむれ』の一シーンで「三人の木樵」の歌が演奏されているのが見られる。傑作とみなされていたものの、４つの田園小説のうち一番長く、筋も入り組んでいるせいか目立たなかった作品に、21世紀にいたってはじめて新たな光が当てられようとしている。

注

1）SAND George, *Les Maîtres Sonneurs*, Éditions Garnier Frères, 1968.（使用テキスト）
SAND George, *Les Maîtres Sonneurs*, Édition de Marie-Claire Bancquart, Folio classique, Gallimard, 2007.

2）その名は「遠くから見ると高みに植林された青い美しい木々が嵐の日には紫色からほとんど黒色になる」ことからつけられた。Cf. LUBIN Georges, *George Sand en Berry*, Librairie Hachette, 1967, p.10.

3）*Les Maîtres Sonneurs*, p.271.《 J'aime mieux une ortie en mon pays qu'un chêne en pays d'étrangers. Le cœur me saute de joie à chaque pierre, à chaque buisson que je reconnais.》ジョルジュ・サンド『笛師のむれ』宮崎嶺雄訳、岩波書店、上巻1937年、下巻1939年。引用はこのテキストによる。ただし、旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めている。

4）*George Sand en Berry, op.cit.*, p.7.《Ainsi s'exprime Tiennet dans *Les Maîtres Sonneurs*, et l'on peut bien dire qu'il est ici le porte-parole de George Sand.》

5）SAND George, *Agendas*, Jean Touzot, 1990, p.77. マンソーの筆による『備忘録』。カッシニは18世紀の地図。

6）*Ibid*.p.86. 1853年２月３日、ノアン。

7）WATANABE-AKIMOTO Chiho, *Les Merveilleux dans l'œuvres de George Sand*, Septentrion, 1998, p.327. 民族音楽に関しては上記の博士論文の第一部第四章「『笛師のむれ』における民族音楽」〈La musique folklorique dans Les Maîtres Sonneurs〉（pp.326-337）を参照のこと。

8）BAROLI Marc, *La Vie quotidienne en Berry au temps de George Sand*, Hachette, 1982, p.165.

9）SAND George, *Les Maîtres Sonneurs*, pp.3-4.ウジェヌ・ランベールはドラクロワの弟子で、同じく弟子であったサンドの息子モーリス・サンドの友人。
ジョルジュ・サンド『笛師のむれ』宮崎嶺雄訳、岩波書店、1939年。本稿中の引用は主にこの訳による。ただし旧仮名遣いは現在のものに改めている。

10）*La Vie quotidienne en Berry au temps de George Sand, op.cit.*, p.35.

11）『我が生涯の記』、加藤節子訳、水声社、2005年、第１分冊（全３分冊）、第２部、第16章、p.606. SAND George, *Histoire de ma vie*, 1854, in *Œuvres autobiographiques*, Gallimard, coll. Bibliothèque de la Pléiade, 1 vol., Paris, 1970. Ⅱe partie, chapitreXVI, p.606. 平井知香子「『愛の妖精』における〈妖精〉について」（関西外国語大学『研究論集』、第90号、2009年、18頁参照。

12）*Les Maîtres Sonneurs, op. cit.*,p.13.《Joset l'ébervigé》《l'ébervigé》は著者の註によれば《étonné》の意味で目を大きく見開いている様子。サンドは登場人物の名前として、エチエンヌ・ドバルデイウ、ジョゼフ、ブノワ、ラムーシュなど実際にベリー地方に存在した人物の名前から取っている。

13）*Ibid.*, p.26.《si vous êtes des bois, je suis des blés.》

14）*Le Meunier d'Angibault*, Paris, Librairie Générale Française, 1985, p.290.

15）*Les Maîtres Sonneurs, op. cit.*, pp. 73-74.

16) SAND George, *Consuelo La Comtesse de Rudolstadt, Tome I*, Les Éditions de l'Aurore,1991, Chapitre LⅢ. ジョルジュ・サンド『歌姫コンシュエロ―愛と冒険の旅』上、藤原書店、2008年、第Ⅱ部ボヘミヤ、53「ヴァイオリンの魔力」参照。

17) *Ibid.*, Chapitre LV. 前掲書、55「民衆音楽」参照。

18) *Les Maîtres Sonneurs, op. cit.*, p. 98.

19) 『笛師のむれ』下巻、164－165頁。

20) Sophie Anne LETERRIER,《Arts et Peuple dans Le Companon du tour de France de George Sand》in *Le Compagnon du Tour de France de George Sand*, Études réunies par MartineWATRELOT et Michéle HECQUET, Université Charles-de-Gaulle-Lille 3, 2009, p.130.

21) *Agendas,op, cit.*, p.86.1853年1月9日。George Sand,Correspondance TomeXI, Classiques Garnier,p.603.

22) *Les Maîtres Sonneurs, op. cit.*, p.257.

23) *Ibid.*, pp.262-263.

24) *Ibid.*, pp.264-266.

Trois fendeurs y avais,
Au printemps, sur l'herbette ;
(J'entends le rossignolet),
Trois fendeurs y avait,
Parlant à la fillette.

Le plus jeune disait,
(Celui qui tient la rose),
(J'entends le rossignolet),
Le plus jeune disait :
J'aime bien, mais je n'ose.

Le plus vieux s'écriait :
(Celui qui tient la fende)
(J'entends le rossignolet),
Le plus vieux s'écriait :
Quand j'aime je commande.

Le troisième chantait :
Portant la fleur d'amande,
(J'entends le rossignolet),

Le troisième chantait :

Moi, j'aime et je demande*. (*demander には求婚するという意味がある。et, ette は接尾語。和訳は筆者による。) この歌詞は実際に流布していたものをサンドが小説に合わせて変化させたのではないかと思われる。実際に採録されている歌詞には、三人の樵と王の娘とのまったく別のヴァージョンのものもある。(Folio 版参照)

25) Cf. *Les Maîtres Sonneurs*, Édition de Marie-Claire Bancquart, p.44.

26) George Sand, *Jeanne*, Glénat, p.32.

《Voilà six mois que c'était le printemps, etc.》

《C'étaient trois petits fendeurs, etc.》

《Chante, rossignol, chante, etc.》

(『ジャンヌ』藤原書店、2006年、327頁。)

27) ジョルジュ・サンド『森の笛師』(世界名作物語)、和田傳訳、ポプラ社、1951年、247頁。訳者の和田傳 (わだ つとう、1900-1985) は、神奈川県厚木市生まれの作家。一般的には「わだ でん」と呼ばれている。早稲田大学フランス文学出身。訳書にバルザック著『田舎醫者』(大正12年、新潮社、バルザック傑作叢書 3)がある。農村を舞台とした作品を得意とし、その一つ『鯖雲』は映画化された。著書『自然・田園・農人』(文明協会ライブラリ、1928年) の中の「ジョルジュ・サンドと田園讃美」の章でサンドを取り上げている。ユリエルについては、森の民でありながら平地の民の心を持つ「農人」であるとしている。

28) *Au pays de George Sand Sur les pas des Maîtres Sonneurs, entre Berry et Bourbonnais*, Fédération Français de la Randonne, Pédestre 2006. ベリーからブルボネへの旅の地理に関してはこのガイドブックを参考にした。

(ひらい・ちかこ　外国語学部教授)